

多様性が受容され、今がある



絵画部で描いた作品と、自身の著書とともに写る堀江珠喜さん

大阪府立大学教授の堀江珠喜さん(62、1973年卒)は「自分を表現できるものを探す」高校時代を送った。制服がないから、ファッションもその一つだった。ある時は、スカート丈40センチのミニスカートに、髪形はワングス。編み上げブーツにトンボ眼鏡で学校に通った。

比較文学や女性学の研究者となり、これまで25冊の単著を出している。「自分を表現できるものは、『言葉』だったんですね。書くことは息をすゝると同じで、生きている証(あかし)です」

2年生の時に、イタリヤへ留学。自ら選んだ国ではなく、日本経済団体連合会(経団連)の奨学生として渡った。2年間の休学はできず、高校は中退することに。親は心配したが、「恐れ知らずだった。その先のことを気にせず、決めていました。留学先で「外国語は楽しい」と知り、帰国してから、フランス語や中国語、ロシア語も学んだ。京都大学法学部を卒業後、外務省に入省。語学力を生かし、主要国首脳会議(サミット)で首脳の配偶者の通訳も経験した。フランスでの研修後、フランス語圏のアフリカでの勤務を希望したが、かなわなかった。

高校では絵画部に所属。思いつくままに油絵の抽象画を描いた。部長になり、他校との交流や、学校から活動予算を多く引き出す交渉も経験した。「画才は伸びなかったけど、マネジメント能力があったかしら」

4カ国語を話せるという顧問の先生にも、影響を受けた。神戸大学教授で軍備管理や安全保障をテーマに研究する林美香さん(46)



「変わることを求めるのではなく、そのままを受け入れる学校だった」と林美香さん

も、「外の世界に行きたい」という思いが強かった。留学を意識し、高校では日本文化を紹介できるような茶道部に入った。

「外の世界に行けないなら」と外務省を約5年できっぱりと辞め、東京大学大学院に入学。国際法を研究した。

「神戸女学院では、人の『多様性』を学びました。いわゆる変わった人が多く、私もその一人だったのかも。でも、みんな必ずどこかのグループに受け入れられていた。決断に迷いが無い生き方をさせてくれたのは、そのおかげかもしれません」(中塚慧)